

僕の彼女を紹介します

2004(平成16)年12月19日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・脚本=クァク・ジェヨン/出演=チョン・ジヒョン/チャン・ヒョク/キム・テウ/
チャン・ホビン(ワーナー・ブラザース映画配給/2004年韓国映画/123分)

……「猟奇」ブームをひきおこしたチョン・ジヒョンが今度は元気いっぱい(?)の婦人警官に。そしてやさしい彼との出会いは誤認逮捕から! 予告編ではコメディタッチの恋愛劇かと思っていたが、その予想は大ハズレ! 後半は美しいストーリー展開をみせていく。「強さ」ばかりでなく、女性の心の葛藤を表現したチョン・ジヒョンの演技力のすばらしさにも感心! 「韓流」純愛モノは単なるブームではなく、こりゃホンモノだ!

『猟奇的な彼女』の再登場!

日本で2003年に公開された『猟奇的な彼女』は、既に2000年に公開され大ヒットした『シュリ』に続いて日本でも大好評のうちに迎えられた。私がこれを観たのは、爆発的ブームから大きく遅れた2004年1月29日だったが、その面白さと、まさに『猟奇的』=チョン・ジヒョンの魅力にビックリしたものだ。もっとも大ヒット作が生まれるとそのイメージが固定され、次作以降が難しくなるもの。チョン・ジヒョンは、『猟奇的』のイメージから脱皮すべく、その後『4人の食卓』(03年)に出演したが、私にはこれはどうも……? もともとホラー映画が好きでないうえ、こんなワケのわからない映画では、彼女の魅力の発揮はもうひとつ……! と思っていた途端、この『僕カノ』で一気にその不安がふっ飛んだ。『猟奇的』と共通するちょっと変わった性格(?)のヒロインによる恋愛劇ながら、この映画の後半では彼女はしっとりとした女性らしさそして心の弱さそして内面の葛藤を実にうまく演じているため、最後には大きな感動が……。笑いで包まれるエンディングではなく、劇場内のあちこちではかなり大きなすすり泣きの

声が……。まさに『僕カノ』＝チョン・ジヒョンの魅力全開の作品だ！

この『僕カノ』はあの『猟奇的』の脚本を書き、監督したクァク・ジェヨンが再びチョン・ジヒョンとコンビを組んだもの。この監督は、『猟奇的な彼女』の後、私の大好きな『ラブストーリー』（韓国公開03年1月・日本公開04年1月）（『シネマルーム4』127頁参照）の脚本を書いて監督したうえ、今や日本のおばさんたちにペ・ヨンジュンと並んで人気絶頂のイ・ビョンホン主演の『純愛中毒』（韓国公開02年10月・日本公開04年4月）の脚本を書いているとのこと。彼は1959年生まれだが、これらの作品の脚本の見事さを考えれば、こりゃかなりの才能。また脚本のみの作品として、今後公開予定作のアン・ソンギとチェ・ジウが主演する『ピアノを弾く大統領』があるとのことなので、これも楽しみだ！

韓国の恋愛事情における「力関係」は？

誤認逮捕から始まった2人の交際は『猟奇的』と同じく「女性上位」で、すべてにヨ・ギョンジン（チョン・ジヒョン）が主導権をもっていた。たくさんの荷物を抱えて階段を上るのに「フーフー」言っているやさしい彼氏のコ・ミョンウ（チャン・ヒョク）に対して、ギョンジンが「カレならカノジョのために尽くすべきでしょ？」と言い放つのをみると、私にはちょっとムカつくところもある。しかしそれは、所詮韓国の若い男女の力関係の問題だから、日本のおじさんの私が文句を言う筋合いではないのは当然。その他、彼女がデートに遅れても文句を言わ（言え）なかったり、当然のように男が食事の後片付けをしたり、そりゃ韓国の男性もやさしい若者ばかり……。 「女に尽くす男が増えている」のは、日本も韓国も同じということか……。 もっとも日本では結婚後も女性上位だが、韓国では結婚後は亭主閑白に変わる男性も多いとか……。 ホントかな？

なお、この映画も『猟奇的』も、若い男女の恋愛劇につきもののセックスの面を一切省略しているのが大きな特徴。意識的にそうしていることは明らかであり、だからこそギョンジンのように个性的で力強く魅力的な若いヒロインが生まれてきたわけだ。この2つの映画のような「からっとした」男女関係はたしかに1つの理想だが、現実はずっとそうではないはず。若い男女の恋愛劇には常にセックスの問題がついて回るから、いつも複雑でややこしいことになるのだが……？

面白い伏線がいくつも……！

2人がはじめて婚前旅行(?)に行ったとき、カマドで火を焚きながらギョンジンがミョンウに語って聞かせる「小指の約束」の物語は面白い。もともと、なぜ急にギョンジンが中世ヨーロッパの王国のお姫様として登場し、ミョンウが鎧兜に身を固めた十字軍の騎士として登場してくるのか、またなぜ騎士との結婚やその死亡にまつわる「小指の約束」の物語が展開されるのか、と考えると、多少違和感があったことは事実。パンフレットの中にある、姫野カオルコ氏の評論「ラブロマンスはベタでいい」には、「作中劇の王女様の扮装なんかぱっちりキマってた」と書かれている。たしかに背が高くスタイルのいいチョン・ジヒョンには、中世ヨーロッパの王女様の衣装はよく似合っていたが、ムリがあるのはその顔つき。姫野氏は「たとえるなら『アジアのオードリー・ヘップバーン』かな」と書いていたが、それはちょっとほめすぎ！ やはり韓国人の顔では、中世ヨーロッパの魅力的な王女様の雰囲気表現にはちょっとムリがあると私には思えたが……。

その他、お互いが「交際100日目」にプレゼントとして交換する詩人皮千得の詩集やミョンウが持つ1枚の卒業写真等の小道具は、2人の恋愛模様が後半大きく変化していく中で、それぞれ重要な伏線に……。このストーリー展開を観ていると、クァク・ジェヨン監督の脚本家としての才能がわかろうというものだ。

自殺するの？ それともしないの？

前述の、伏線となる中世ヨーロッパの王女様は、愛する夫の魂が49日後に戻ってきたものの、その死亡が確認されたため、悲劇の「後追い自殺」をすることに。そしてこの映画でも、やさしいミョンウは何と脱獄囚のシン・チャンス(チャン・ホビン)を追跡していたギョンジンの拳銃の弾にあたって死亡するというショッキングな結果となったため、ギョンジンもミョンウの後を追ってビルの屋上から飛び降り自殺を……。予告編ではこんなシーンが強調されていた。またそのシーンがこの映画の冒頭に登場するから、ホントにギョンジンは自殺したのか、と興味深くストーリーを注視していたが……。クァク・ジェヨン監督の脚本はそ

んな単純なものではなく、その後の展開はスリリングだから、ご心配なく……。

テーマは「風」

2人が婚前旅行した時、ミョンウがギョンジンに語ったのが「小指の約束」の物語なら、広々とした美しい高原の中でミョンウがギョンジンに語ったのが「風の物語」。それは、「ボクは生まれる前は風だったのかもしれない」というロマンティックなもの。ミョンウはさらに続けて、「ボクが死んだらまた風に戻るんだ」とも……。この話も少しつくり物的な感じはあるものの、ヨン様ことペ・ヨンジュンが言うのではなく、朴訥としたミョンウのキャラにすごく似合ったセリフであり、なんとなく説得力がある……。

そして映画の後半は、まさにこの「風」がテーマ。日本の衆議院議員選挙や参議院議員選挙では、よく「風が吹いたり」「山が動いたり」する。また、関口宏氏の司会で日曜日の朝、TBS系で放映している番組『サンデーモーニング』では、ラスト近くに「風をよむ 21」のコーナーがある。さらに三国志の中の有名な「赤壁の戦い」で、呉の孫権と劉備玄徳の連合軍が、強力な曹操率いる魏の大軍を壊滅させるという奇跡を起こしたのは、諸葛孔明が赤壁の小高い山の上に「拝風台」をつくり、ここで祈願することによって「東の風」を発生させたため（以上は、インターネットによるもの。他方、井波律子訳『三国志演義 3』362頁によれば、南屏山なんぺいざんの上に七星壇しちせいだんを築き、東南の風を呼んだと書かれているが……？ もっとも私の「知識」では、その真相は、諸葛孔明はこの時期、一時的にここにこの方向の風が吹くことをデータとして持っていたということらしい……）。このように風は、さまざまな人間ドラマを生む原動力になるもの。果たしてこの映画では、風はどんな人間ドラマを生むのだろうか……？

七変化(?)するヒロインの表情はお見事だが……

この映画の魅力の源泉は、すべてヒロインのギョンジンにある。この映画でギョンジンは、『猟奇的』の魅力を維持しつつ、それとは全く違う別の魅力をタップリと見せてくれる。前述の①中世ヨーロッパのお姫様スタイルもその1つだが、その他にもたくさんあるので、少しそれを列挙しておきたい。それは、②大きく

両手を広げて風を身体いっぱいを感じているシーン、③ミヨンウが勤める女子校の授業の場に突然制服姿で登場し、何とも刺激的なセリフをはくシーン、④ロングヘアーをなびかせながら、幸せいっばいに手でピストルの形をつくってミヨンウとふざけ合うシーン、⑤2度にわたって、死の直前にあるミヨンウに対して呼びかけ、絶叫するシーン、⑥捜査の第一線に出て、命知らずの活躍をするクールなシーン、⑦屋上の上からミヨンウのことを想って飛び降りるシーン、そして⑧「もう泣かない」と力強く宣言するシーン等々で、さまざまに七変化するヒロインの表情は実にお見事！ そのすべてのシーンで、これはキレイだと思うわけではないが、ところどころでは、「へえ、チョン・ジヒョンという女優はこんなに美人だったんだ」と感心することも……。もっとも映画の中でのギョンジンのストレートの長い髪は魅力的な面もあるが、このヘアスタイルのまま捜査の第一線で活躍することはありえないはず。これだけの美人女優なのだから、もっとさまざまな魅力的なヘアスタイルがあるのでは、と男の私でも思ったのだが……？

X JAPAN の楽曲に大感激！

反日感情が強かった韓国では日本の歌は長い間禁止されていたが、1998年に金大中が大統領に就任した後の同年10月以降、日本の大衆文化の開放が段階的に実施されていった。その結果、日韓の歌の交流は急速に進んでいった。『冬ソナ』ブームは2003年以降だが、それ以前にも「BoA」をはじめとする韓国のアーティストが日本でも大ブレイクしていたのは周知の事実。そして日本語音楽が全面解禁されたのは2004年1月。日本のアーティストも既に韓国でたくさん活躍していたが、日本語音楽解禁を記念して、韓国では2003年12月31日～2004年1月1日、日本の人気バンド「TUBE」の韓国公演も！ クァク・ジェヨン監督は「X JAPAN」の大ファンだったとのことで、この映画のクライマックスでは彼らの『Tears』が使われていた。どこかで聴いたことのある曲だと思いながら聴いてやっと思出したのだが、こんな雰囲気の中で流れるとよけいにすごい名曲だと思ってしまう。こんな日韓の音楽交流が進めば、過去のわだかまりも一気に氷解、とはいかないまでも、大いに意味があるはず……。

2004(平成16)年12月20日記